



Title	外国人の学習と生活をつなぐネットワーク活動の意義：母親たちの協同的な活動「料理交流会」の事例分析から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	本間, 淳子
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第12498号
Issue Date	2016-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/64725
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Junko_Homma_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：本間 淳子

審査委員 主査 教授 宮崎 隆志
副査 准教授 辻 智子
副査 教授 柳町 智治（北星学園大学）
副査 准教授 山下 智也（宮崎国際大学）

学位論文題名

外国人の学習と生活をつなぐネットワーク活動の意義
－母親たちの協同的な活動「料理交流会」の事例分析から－

本論文の目的は、日本語学習に伴う排除性を克服し、学習者が学習の主体として日本語学習を進める条件と過程を明らかにすることにある。

外国人の日本語学習を支援する現場では、早く（2000年前後）から学習の場に潜む非対称性が問題視され、「共生」に向けた学習支援や日本語学習に限定されない生活に関わる支援の必要性が指摘されてきた。しかし、非対称性を克服する日本語教育・学習と、生活に関わる支援の関連については、課題は提起されるものの両者を結びつける論理は不明であった。

それに対し、著者は本論文第一章において、日本語学習の場としての地域日本語教室、および生活支援の場としての幼稚園・小学校・医療保健施設等における実践の展開に関する先行研究をサーベイし、外国人が不可視化された状況から、支援の場が生成することにより、その場を基盤にネットワークが構築・拡大され、日本人・外国人の双方が変容するに至る過程を抽出した。著者は、この過程の展開論理を明らかにすることにより、日本語学習と生活支援の相互関連が明らかになり両者の統一的把握が可能になると主張する。

第二章では、著者自身がボランティア日本語教師としてかかわった二人の外国人母親との実践記録に基づき、上記の過程が分析されている。そこでは、第一に、日本語を学ぶ外国人が、それまで維持していた生活の文脈性を喪失し生活の動機=目的を希薄化させ、生活の自由な編成が困難になりがちであること、第二に、その困難に対し、日本人側からは当該外国人の日本語能力に焦点を当てた問題理解と解決策がとられることにより、生活問題を日本語学習問題に還元し不可視化する「言語的バリア」が発生し、第三に、その下での日本語学習においては、ツールである言語の目的化が生じることにより、支援者の善意にもかかわらず非対称性が避けられず、結果的に日本語教育が行き詰ることが指摘されている。しかし、第四に、その行き詰まりを契機に、学習者から表出された生活上の課題の

解決として始まった料理交流会により、当事者は生活を創る生活を取り戻し、そこでのコミュニケーションに支えられて日本語学習の意欲の向上が見られたことを確認している。

第三章では、料理交流会に焦点を絞り、協同的活動の生成・展開の論理とそこでの日本語学習の意味の転換過程が分析されている。料理交流会は、当初の同質性を持つ他者間での協同活動から外国人母親に限らない異質な経験を有する他者との協同活動へと発展していったことが明らかにされ、それに伴い言語的バリアの下にあった生活の規範性やコミュニティの質、役割分担の方法が固定的抑圧的なものから弾力的で解放的なものへと転換されていったことが確認されている。このような場の変容が言語的バリアを解除し、日本語学習を解放的な学びに転換した。

終章において、著者は言語的バリアを克服し解放的な学びを取り戻す実践の論理をアプロプリエーションとして特徴づけている。アプロプリエーションとは、単に他者の言葉を自己の言葉にすることではなく、生活の主体としての自己の回復と道具としての日本語の獲得との相互規定的な関連構造の全体を意味し、言語生活を含む生活を主体的に構成する集団的協同的活動の生成過程として理解されている。

以上の内容と構成を有する本論文は、教室的日本語学習がもつヒドゥン・カリキュラムと生活における疎外の共犯関係を射程に収めながら、その両者を同時に克服する方途を示している。この成果は、例えば公民館等において開催される地域日本語教室のように、生活場面において成立する日本語学習・教育が、「教室化」することなく、外国人が生活と学習の主体となる学習の場として成立する可能性と条件を解明するための基本的枠組みを提起したものと評価できる。

但し、アプロプリエーションとしての日本語学習論を構築する上ではいくつかの課題がある。第一に、料理交流会におけるコミュニケーションの特質を非言語的側面も含めて分析することにより、アプロプリエーションとしての学びを協同的活動に内在するものとして、より具体的な次元で実証できるであろう。第二に、教室的な学習の場から解放的な学習の場への転換過程では、日本語教育者としての支援者の変容が生じるはずであるが、本論文では必ずしも十分に展開されていない。この論点を射程に収めることにより、場の変容の論理と意義がより明確になるであろう。第三に、協同的活動により生成する場と外部コミュニティとの関係の変容を明らかにすることにより、このような場の維持可能性や外国人と日本人、あるいは地域社会との双方の変容過程を明らかにすることができるであろう。

審査委員一同は、以上の到達点と課題を確認したうえで、本論文が博士論文の基準を満たしていることを認め、博士の学位を授与されるに相応しいと判断した。